三翠化学

（題字は稲川先生）

第8号
昭和53年5月1日　発行
三翠化学会
津市上浜町1515
三重大学農学部
農芸化学科内
振替名古屋　59345
電話（津）<0592>(32)1211

教育に対する提言

今こそみんなで考えてみよう

教育とは、次代をになう者を有能な社会人、人間として育てあげる作業である。つまり人生の先輩が後輩に対して、その蓄積された経験や知識を与え、それがさらに基礎となってよりよい社会、文化の発展を期待する心情がこめられている。したがって教育は、学校のみでなく家庭、職場、地域社会といった人間の生活するあらゆる場で、その機能がはたらいているわけである。その意味で、すべての人々の問題であり、関心事なのである。

もちろん基礎的、体系的、一般的な知識の獲得や、集団的、組織的な訓練は、学校が受けもつ最大の機能であるが、基本的な生活習慣、人生観、勤労に対するとりくみ、社会道徳の体得などは、学校以外の場で大部分が果たされる機能であるといえる。教育というと、とかく学歴社会、受験戦争といったことが、最大のようにとられ勝ちであるが、これはあくまで一つの側面であって、教育の本質はもっと異なる次元で取りくまれる問題なのである。以下、数項目これにかかわる事項を提言してみたい。

一、学校教育における二極構造

学校教育が普及し、高校、大学への進学率が高まると、これらの学校に進学することは当然であり自明の理となる。そうすればどこの学校に進学できるかが問題となる。つまり学校選択が極度に関心事となって、同じ受験といっても戦前のそれとは対応が異なる。差別、選別、劣等意識の助長といった受験にともなうさまざまな波紋が生ずる原因でもある。一流校と二、三流校、普通科高校と職業高校、国公立と私立、公教育と塾、家庭教師の問題等、すべてたてまえと本音がきわめて象徴的に交錯する部分である。しかもこれに父兄の所得水準なども考慮してみると、たとえば学費の安い国公立学校には高所得層の子弟が、学費の高い私立には低所得層の子弟が集まりやすくなっており、近年その傾向がますます顕著になってきている。

二、高校入試はセレモニー

現今の各家庭の所得水準からみて、経済的理由によって高校、大学への進学を断念させるということは、ほとんどないといってよい。だから学校数も増加の一途をたどり、学校選択さえしなければ日教組が主張しなくても、全入なのだ。したがって高校進学の場合あぶれることは余程のことがないかぎり、本人はともかくとして、側が許さない。いきおい進学指導は、きわめて安全圏をきわめることになる。いろいろの資料、データーをもとにして、各種の学校に振り分けられるのである。極端に言えば、受験以前に自分の進学する学校は決まっているといってよい。高校入試など一種のセレモニーだといっても過言ではない。希望する学校に進学できた者はよいが、そうでない者はチャレンジする機会もなく、まさにアテ馬よろしく見せつけられて止めておけということでは「勝手にしやがれ」であって、入学当初から絶望感にひたっているわけであり、高校をとりまくすべての問題はこれから端を発している。だからといって高校格差をなくしすべて一律にということは暴論であって、人それぞれのもつ多様な能力を学校教育という単一な枠組のなかにとじこめ、これが教育の機会均等だとしているところに問題があるのではないだろうか。そもそも社会常識をこなしていくために必要基礎学力は中学校卒で十分であって、それ以上を期待する者に高校、大学の進路は保障されるべきであり、簡単な加減乗除すらできない者に微分積分の教育課程をとり入れるなどナンセンスをこえてお笑い草もいいところというべきであろう。

三、家庭教育と基本的生活習慣

日本人はきわめて勝気で向上心の強い民族といわれる。明治以来の近代化、戦後の経済発展、いずれをとってもそのめざましい躍進は他に類をみないものである。

それというのも全部とはいわないにしても〝せめて子供にだけは〟といった意識で、子供の教育に対してすべてを犠牲にとりくんできたことが大きな原動力になったことはいなめない。それゆえ教育といえば学校、学校といえば資格といった図式が構築され、家庭教育の果たす役割が見落とされてきた面があるのではないだろうか。

たまたま家庭での教育がなされていても、それは学校教育のミニ版であったり、焼きなおしであったりして、むしろそれは親子の断絶の素材になるのが関の山で、本来的に家庭で受けもつ教育の役割でない場合が多い。しかも一般的に親の方が子供よりも低学歴である場合が多く子供に対する自信そう失といった形でへり下るか、いだけ高になるか、それともぐちるといったことが多く、これでは家庭教育はなされない。親の権威は子供とくらべ基礎学力が多いか少ないかが問題ではない。親が子供を生み、育ててきたこのことだけでも子供にはない素晴しい権威だということを認識すれば、自信をもって子供に接することができるだろうし、そのことが子供に対する躾、基本的生活習慣の形成に役立つ部分なのだ。

子供は親の生活態度から自分の人格をつくり上げていく。子供の個人の自覚は、学校などで絶対にできるものではない。それこそ家庭教育の果たす最高の機能なのだ。

四、企業内教育の功罪

毎年四月ともなれば各企業に於いては新入社員の教育、研修に力が注がれる。とくに最近の学校教育には節度ある行動や規律を身につけさせることが欠けているから、こういった面にもかなりのウェートが置かれているようである。高い人件費を支払い「企業は人なり」ということになれば、その企業にとって十分な戦力となり、役立つ人材に育て上げなければ企業の浮沈にかかわるという公教育にはみられない緊迫感と切実感それに真剣味のあることは否定できない。かといって人間は資材ではない。教育はメリット、デメリットといった部分のみの追求ではない。その企業では使えるが他所では役に立たないといったこともよく聞かれる話である。終身雇用性が日本の経済発展をなしとげた一つの柱であったが、減速経済ではむしろそれが重荷になりつつある。「わが社」で代表される日本株式会社は発思の教育システムも、もっと高度の次元と広い視野に立つ対応が考えられてよい時期でもある。

総説

新しい食品の開発と女性

吉田　弘一（大一）

私達の食生活を振り返ってみると戦中、戦後は麦飯に味噌汁、漬物、魚、豆腐などを食べておれば良い方で、それさえも十分に摂れなかった。そのことを思えば現在はぜいたくざんまいの食生活ができるようになっている。日常摂っている食物はわが国古来のもののほか、諸外国から輸入された食品、またはこれらの食品を加工して作られたものが多く、かつては想像もされなかったほど豊かで、欧風化されたものが多くなっている。

このように豊かな食生活ができるようになったのはわが国が世界の経済大国と言われるほどの国力をもっていることのほか、三翠化学会の皆さんを含めた食品関係の技術者、研究者の日夜の研さんのたまものである。このことはわが国の食料品製造業の生産高が全製造業の中で第一位を占め、年間15兆円余の生産額（50年工業統計）を誇っていることからもうかがえる。

一方、食品はわれわれ人間の生命にかかわるものであるだけに絶対に安全なものでなければならない。特に最近は食品に対する一般の知識水準が高い上に、インスタント食品や調理済の食品などが多く出廻っており、これらの加工食品を適当に組み合わせば食ぜんを十分、にぎわすこともでき、栄養的にも満足できるものがえられるようになっている。それだけに消費者は食品の安全性に対して格別の注意をはらうわけである。

また、近年栄養過多にともないろいろな問題が起っている。肥満、高血圧、心臓病、糖尿病などの成人病である。一般的に言えば欧米に比べて日本人はカロリーもタンパク質の摂取量もまだ少ない。しかし本来、食物はその風土が長い間つくり出したものであるから、風土も体質も違う欧米人と同列に論ずることのむつかしさがある。食生活の改善、向上はまだまだ必要であるにしても畜肉類を主体とした欧風化だけが唯一の方法でないことを示唆している。

今後ともわれわれの食生活は改善され、向上する中で、多様化が一段と進むものと思われる。それに対応して新しい食品の開発も活発に進められるでありましょう。これらの新しい食品は消費者が志向する、いわゆる美味で、便利なもの、そして安全で、日本人の風土と体質を配慮したものでなければならない。しかし、日常実際に食品を購入し、調理するのは主婦が中心であるだけに、女性がおいしいと感じ、食ぜんに積極的に取り入れられるものであることも必要である。従来ややもすれば食品の開発に関与する研究者は男性のみによることが多く、この点の欠如した食品も多くみられた。その意味で食品の開発に女性がもっと関与してしかるべきだと思う。

三翠化学会の皆さんの活躍されている食品関連の職場に、例えば大学、短期大学の栄養学科、食物学科を卒業し、栄養士などの資格をもった女性を一人でも多く採用され、研究開発の要員として育成していただきたいものである。それが消費者のニードにあった食品の開発につながるものと確信する。

食品の調味、取り扱いの便利さ、およびムード・格好などの社会心理的条件を消費者志向に合致させる上で、また調理学、食品学、栄養学、医学などの学際的分野の仕事を進める上で女性研究者は欠かせない存在であると考えるからである。

会費納入のお願い

昭和五十二年度までの会費を未納の方は是非とも至急納入いただきますようお願い致します。

現在四一五名の方が五十二年度会費を納入いただいておりますが、本会は一〇〇%納入いただいて、かろうじて最低の活動が維持できる状態にあり、今回お配りした三翠化学第八号の印刷費も支払が滞っているような次第です。出費多端の節、誠に恐縮に存じますが、窮状を御賢察の上会費払込に御協力いただきますようお願い申し上げます。

昭和五十二年度までの所定の金額以上をお送りいただいた場合はお申し出のない限り昭和五十三年度以降の会費にあてさせていただきます。また会員の皆様には各自の会費納入状況を記入したカードを同封致しました。御確認の上納入いただきますようお願い致します。なお会費納入の際、振替用紙等の通信欄に「卒業回数」と「何年度会費」とご明記いただければ幸甚です。

振替番号
名古屋　59345

谷中、田口両氏 学会賞に輝く

谷中国昭氏（大13回、日本農薬KK化学研究所）は一昨年の大河内記念技術賞に引き続き、〝ケテンジチオアセタール誘導体の農薬への応用に関する研究〟で本年三月、日本農薬学会奨励賞を受賞されました。また田口寛氏（大17回、三重大学農芸化学科生物化学研究室）は〝ブタ肝臓の Quinolinate phosphoribosyltransferase に関する研究〟で昨年六月、日本ビタミン学会奨励賞を受賞されました。若い三翠化学会にとってふさわしく、また喜ばしい出来事です。両氏の今後の活躍を期待すると同時に会員諸氏への刺激となり、各分野に於ける三翠化学会会員の活躍へとつながっていくことを願っています。

お知らせとお願い

この会報第八号は52年度当初計画においては、一～二月頃発行予定でありましたが、役員会において、この時期（春）がよいとのご指摘をうけましたので、当初計画よりも二ヶ月遅れましたことをご了承下さい。

次号（第九号）は八～九月頃発行を予定しております。原稿をお寄せ下さいますようお願い致します。「総説」、「大学（高専）時代の思い出」、「今私は…」「クラス会だより」、「社会人一年生」、「職場紹介」その他詩歌、俳句、随筆、何なりと結構です。ご寄稿をお待ち致します。

訃報

松下富士子さん（大23回昭和50年3月卒）は、昭和50年10月ご逝去されました。こゝに謹んでご冥福をお祈り致します。

総会ご案内

五十三年度定期総会名古屋にて開催
五月二十一日（日）
午前十時三十分より

昭和五十三年度三翠化学会定期総会は来る五月二十一日（日）に名古屋市の全逓名古屋会館で左記の要領にて開催することになりました。

どうか万障お繰合せの上、ご出席賜りますようお願い申し上げます。尚準備の都合上、同封の葉書にて出欠のご返事を五月十五日迄にいただければ幸甚に存じます。

記

一、日時　五月二十一日（日）
総会　午前十時三十分～十一時
講演会　十一時～十三時
演者　**鈴木一夫氏**（中日新聞論説員）
（高農・農学科昭和十五年卒）
パーティー　十三時より

一、場所　全逓名古屋会館
（名古屋駅より徒歩五分）
名古屋市西区牛島町86
℡〇五二・五七一・〇六九五

一、会費　四千五百円

職場紹介

「アメリカのキッコーマン」

服部照光（大六）

高橋孝雄氏の指示は「職場の紹介」と言うことですから、テーマに従って書くつもりですが、少々の脱線はお許し願い度。経験談や、感じた事も加えます。

一、キッコーマンの子会社

アメリカに三社あります。KIKKOMAN・INTERNATIONAL・INC、KIKKOMAN・FOODS・INC及びJAPAN・FOODS・INCです。

私の属しているKIKKOMAN・INTERNATIONALは、SANFRANCISCOにヘッドオフィスを置き、五つの支店で全米をカバーし、キッコーマン製品の販売を行っております。設立後二十二年ですから、日本の米国進出企業の中では古株です。

二、他の二社

KIKKOMAN・FOODS・INCは、ウィスカンシンの田舎町、ウォルワースに設立された醤油醸造工場です。シカゴの北六十マイル（百キロメーター）の所です。設立後五年目ですが目下拡張工事に入っております。こゝで造られた醤油の品質は、日本のキッコーマンにもひけを取りません。かなり醤油の品質についてうるさい方でも見分けられないでしょう。

JAPAN・FOODS・INCは、沢庵貿易に始まる戦前からの古い会社で、十年前にキッコーマンに参加したものです。名前の通り、日本風食品を中心にアジア風食品を取扱うホールセラーです。サンフランシスコに本店、五つの支店、方々に出張所を持っており、この種の企業ではアメリカ最大です。この倉庫は日本のスーパーマーケットの倉庫と同じ位の食品の種類を持っております。この為アメリカでは日本食に未練のある人でも全然心配いりません。

壁の写真はWisconsin WalworthのPlant. 机の上は商品群です。made in U.S.A.もmade in Japanもあります。

三、醤油の市場

醤油の消費量は、工業用、業務用をも含めて、日本では年間一人当り十リッターです。アメリカでは十分の一リッターです。人口は約2倍ですから全消費量は、約二%です。未だ少い量ですが、これは逆に将来性豊かと言えます。現在キッコーマンはアメリカの醤油のシェアの四十%を占めるに到りました。と言うのは、以前は、いわゆる化学醤油がアメリカの市場を支配しておりました。蛋白の塩酸分解液に食塩と水飴を加えカラメルで着色したものです。日本に於て正常なセンサリーを持った人は醤油とは認めないでしょう。当然アメリカに於ても多くの人はバッグジュースと言って馬鹿にしておりました。味、香共劣悪でバッタの出す悪い汁の様だと言う事です。この様な所でしたが、醸造醤油で高品質なもので、何の様にでも使えるオールパーパスシーズニングとして挑戦したのです。強力な大企業に支えられた化学醤油の二つのブランドも既にはっきりと、キッコーマンの下位になっております。

この歴史は、昨年十二月十六日の、ウォールストリート・ジャーナルの第一面で紹介されております。日本で良いものはアメリカでも良いと認められ、確実に根をおろすでしょう。アメリカに於ても、まがいものでない、と言う意味の、ナチュラルな、トラディショナルな、又高品質な物への指向があります。この為に、即これに迎合して醸造物と言いながら全然醸造醤油の入っていないものが、日本製醸造醤油として時々アメリカで見かけられます。貿易立国の日本の企業として、おそまつな行動ですし、困ったものです。

四、ディズニーワールドのレストラン

昨年十月初旬、フロリダのディズニーワールドに、キッコーマンレストランがオープンしました。今年はロス・アンジェルスにあるディズニーランドにもオープンの予定です。これはキッコーマンからのアプローチにより認められたものではなく、ディズニー側のきびしいアセスメントに合格したものです。良い宣伝媒体である事にとゞまらず日本の伝統の良い味が白人社会にも認められたことを証明するものです。

五、学校の事

脱線の始りか?、私事の様ですが、海外出向者が持っている共通の悩み事です。子供の教育に関しては、「行きは良い良い、帰りは恐い」が実情です。こちらに来る時には、子供がアメリカの学校に順応するかどうかゞ心配でした。一言もしゃべれなくとも、当人の相当の努力もありましたが一年経てば面白くやっています。勿論種々なハンディキャップはある中で、ジュニアハイ（中学校）、ハイスクール（高校）共、うまく受入れてくれます。スポーツ競技の代表になり対校試合に出たり、時には英語のディクテーションでクラスのトップになり、プライズをもらって帰って来る事もあります。「いわゆる外人に対しても、何ら差別なく受入れてくれる体制が出来ています。日本ではシティズンの帰国に対してさえ、教育機関の受入れ体制が不充分なのは困った事です。中学二～三年で、日本の受験戦争の中へ、あえて子供一人で帰らせる人の居るのを見て、おだやかならざるものを感じております。ある時、代議士がこちらにいらっしゃって、受入れ体制を良くする事を誓って帰りました。私の方は、半分これを期待し、成りゆきにまかせるつもりです。

六、アメリカの車社会、日本の精密機械

アメリカの道路は全く良く出来ております。英語が読め、地図が読め、運転出来れば、道に迷う事はありません。飛行機で目的地の近くへ行き、以後レンタカーで目的地に行くのに、人に道をたずねる事はほとんどありません、間違いなく行けます。私は毎日十四マイルの所を往復しております。この所、日本の車が非常に多く、更に増加している様に思われるのです。日本の車が評判が良いのは、故障が少い、マイレージが高い、仕上げがきれい等々の為です。本田のアコードは完全な売手市場です。オートバイも日本のもの以外のものを見つける事は大変です。カメラや、電気電子製品、シューイングマシン、時計等非常に評価が高い。シアーズにシューイングマシンを買いに行った時、その担当者から、カメラは勿論、時計も本来の時計の性能では、セイコーが断然世界一である（日本人がスイス時計をほしがる事を私が伝えると）、日本人は金持になったからアクセサリーを買うのだ、と言って笑っていた。

× × ×

結論として、アメリカは広大で底力のある国です。日本は工業国でアメリカは農業国と言う感じがします。貿易面で目下日本は、方々の国からクレームが来ております。工業の面で非常に優れているからです。現在レーバーの所得は欧米に比べて優るとも劣らずの所に来ております。原料はほとんど全て海外依存です。しかし良いものを安く日本では作っているから、黒字国だの、又エコノミックアニマルだの批難を受けながら、尚輸出が出来、経済の繁栄を謳歌出来るのです。日本がこれを止めれば、又出来なくなれば、戦後の生活程度に、生活を切りつめざるを得なくなります。日本は全ゆる分野にオープンマインドになるべき時と思います。日本では「米」以外にIQを設ける必要があるのでしょうか、只工業技術は高水準に如何としても保つべきです。これが日本の生きてゆく路だと思います。海外に出ると国粋主義になる人もいる様ですが、私自身そんなつもりはありません。只感ずるまゝ脱線しっぱなしで筆を置きます。

嗚呼、稲川先生逝去さる

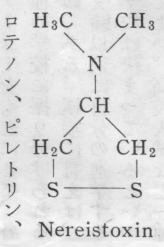
三重大学名誉教授・三翠化学会賛助会員であられた稲川次郎先生は、かねてより入院加療のところ、薬石の効もなく去る昭和五十三年二月三日ご永眠されました。わが農芸化学科の父ともいうべき先生を失なったことは、私共三翠化学会員にとって一大痛恨事であります。しかし、天命ともなれば如何ともしがたく、ここに謹んで先生の御冥福をお祈り申しあげる次第であります。

先生は、大正十年四月東京帝国大学農学部農芸化学科をご卒業後、創設間もない三重高等農林学校教授に就任（大正十二年四月）され、同学園の発展に尽力されました。昭和十九年四月三重高等農林学校は三重農林専門学校と改称され終戦を迎えたのであります。その後間もな農産製く造科が新設（昭和二十一年四月）されるや、同科の主事として物資欠乏の時代に長瀬重蔵先生とともに献身的なご努力をいただき、今日の農芸化学科の母体を作りあげられたのであります。昭和二十四年五月、大学制度の改正に伴い三重大学が創設されるや、農学部教授としてさらに農産製造学科の主任教授としてご活躍されました。昭和二十八年四月、農産製造学科を改組し農芸化学科として新発足するにおよんで名実共に今日の農芸化学科発展の基礎を作りあげられたのであります。発足当時は四つの講座からなっておりましたが、昭和三十五年十月停年退官される迄の間ご自身は第一講座（土壌肥料学講座）の講座担当者として教育研究に没頭される一方、学科主任としてご活躍され学科発展に寄与された点まことに大きなものがありますことは周知の通りであります。

この様に、稲川先生は農芸化学科の創立・発展とともに歩んでこられた次第でありまして、稲川先生をぬいては農芸化学科の歴史を語ることはできなく、農芸化学科の父と申しました所以は実にここにあります。三重高農教授にご就任以来実に三十七年五ヶ月の長期にわたり学生の教育と学術振興にご専念され幾多の有為な人材を社会に送り出されるとともに、大学発足以来評議員として大学の管理運営に参画されました。本学発展の礎を築かれました功績はまことに顕著であり昭和三十六年二月三重大学名誉教授の称号を同四十四年十一月勲三等旭日中綬章を授与されております。ご退官後、昭和三十八年四月から昭和四十五年三月迄名古屋女子大学教授として女子高等教育にご専念されたのであります。

研究面におかれましては、「オサムシの有機塩基に関する研究」、「土壌の機械分析法について」、「潮水害畑地土壌に関する研究」、「砂質土における蔬菜の加里欠乏について」、「湛水土壌中に生成される有機酸の検索」等について数多くの研究成果を発表しておられますが、とりわけ「オサムシの有機塩基に関する研究」は今日極めて高く評価されております。そのご研究の概要を簡単に紹介致しますと以下の通りであります。

伊勢湾沿岸地方で俗に「オサムシ」と称する環形動物・毛足網・多毛目・「イソメ」科に属するLumbriconereis japonica MERENZELLERの生体またはその腐敗分解物中に有毒成分の存在することを発見されました。ついでオサムシ生体中から未知の有毒成分である特有の臭気を有する含硫アミンを単離しその分子式を、$C_5H_{11}NS_2$と決定されるとともにその毒性について検討されました。その成果は、三重高等農林学校学術報告第五号・四十九頁～五十七頁に発表しておられます。時、まさに昭和十年でありました。この新毒素ネライストキシンの構造は昭和三十五年になってようやく橋本氏等によって決定され、ついで昭和四十三年に至って小西氏によって合成されたものであります。



Nereistoxin

ロテノン、ピレトリン、ニコチンをはじめとして従来知られている天然産殺虫性化合物はいずれも植物起源でありますが、動物起源のネライストキシンはテトロドトキシン（フグ毒）等と並んで海外でも特別の関心が寄せられています。「オサムシの有機塩基に関する研究」はこれらの先駆的研究として高く評価さるべきものであります。

以上の様に、教育・研究にあるいは大学運営にご尽力される一方、日本農芸化学会、日本土壌肥料学会の評議員として学会発展に寄与されるとともに、昭和三十五年から今日迄中部土壌肥料研究会の名誉会長として大いにご活躍してこられました。

先生のお人柄については今更私が申しあげる迄もありませんが、一口で申せば無慾恬淡虚飾を好まれない高潔なお人柄でありました。先生は現職時代から卒業生のまとまりを念願しておられ、事ある毎に同窓会設立を説いておられました。三翠化学会生みの親はまさに稲川先生であります。昭和四十八年十一月の三翠化学会設立総会には所用がおありでご出席いただけなく大変残念でありましたが、その直後お宅に伺い設立の報告に参りました時、十五年来の念願がかなえられたと申され、涙を流さんばかりによろこんでいただいた情景は今おはっきりと私の瞼にやきついております。その後、会報「三翠化学」の発刊に際し題字の揮毫をお願いにお宅に参上した際、家人により買い求められた新品の筆と墨により書いていただき恐縮するとともに先生の心意気と面目躍如たるものを感じた次第であります。先生のご念願通り、会員相互の連携と母校の隆昌を念じて発足したわれ等の三翠化学会は躍進を重ね会員数約八百八十名に達するとともに関東支部、東海支部、三重県庁支部、三重県教員支部と支部設立も順調に進んでおります。会員相互の縦横のつながりをより一層強固にし三翠化学会をますます発展することこそ稲川先生のご遺志に副うことと信じております。過日、四月二日に実現の運びになりました三翠化学会東海支部設立の報告を先生の墓前で行いますとともに、この誓いをあらたにした次第であります。

未熟者の私共にとって、特に学生時代には先生のご人格を何一つ理解できなかったのでありますが、卒業後何年かたってからようやく先生の真価の一端が判って参りました。色々な意味で教えられるところ実に多大と申せます。

教室での格調高い講義、実験室での厳格な指導、卒業生への思いやり、家庭でのよき親父、海釣りのベテラン等々、いま筆をとっている私の脳裏を先生の思い出がつぎからつぎへと走馬燈の様に走りすぎています。口はばったい表現でまことに申訳ありませんが、実に偉大な師であり、よき親仁でありました。

幽明境を異にするとは申せ、どうか本学農芸化学科と三翠化学会の発展を見守っていただきます様お願い申しあげます。

（嶋林幸英）

御略歴

本籍地　三重県津市丸の内二〇八四番地の五二

現住所　三重県津市広明町八五

稲川次郎

明治二九年一一月一日生

大正一〇年四月一五日　東京帝国大学農学部農芸化学科卒業

大正一二年六月二五日　三重高等農林学校教授

昭和八年九月一日　陞叙高等官三等

昭和一〇年二月八日　叙勲六等受瑞宝章

昭和一四年三月二三日　叙勲五等受瑞宝章

昭和一七年三月三一日　農学科主事兼農村工業実科主事

昭和一九年四月一日　三重農林専門学校名称変更・同校教授

昭和二〇年四月一八日　叙勲四等瑞宝章

昭和二一年六月二二日　農産製造科主事

昭和二四年五月三一日　三重大学三重農林専門学校教授

昭和二四年六月三〇日　三重大学教授

昭和二五年九月一六日　三重大学評議員

昭和三五年一〇月一六日　昭和三五年一〇月一五日　日停年退職

昭和三六年二月一六日　三重大学名誉教授

昭和三八年四月一日　学校法人名古屋女子大学教授

昭和四四年一一月三日　叙勲三等旭日中綬章

昭和四五年三月三一日　学校法人名古屋女子大学退職

研究室近況

生物化学研究室

当研究室は一号館二階の中央にあり、見晴しも比較的良い所に位置している。この三月一日より、高橋先生が栄養化学研究室の教授（石川先生の後任）に昇進されたため、現在では教官は嶋林先生と田口の二名である。

三月二十五日に修士修了生二名、学部卒業生四名を送り出したところであり、四月からの新専攻生は、卒論生が四名来ることになっており、修士二年生に進級する三名と修士一年生に進学する一名を合わせて、専攻生は総数八名である。この他に四年生で休学中が一名いる。

現在当研究室で行なっている研究としては、嶋林先生を中心に「鶏卵ふ化時の生化学的研究」と題し、鶏胚DNAの構成塩基、とりわけ微量成分およびDNA代謝と密接な関連性を有する酸可溶性デオキシリボシル化合物の精製・同定に関する研究を進展中である。今後、これらの諸結果をベースとして、鶏胚成長に伴うDNA代謝を解明するのが夢である。高橋先生を中心に「植物のレクチンに関する研究」が行なわれているが、その詳細は後日栄養化学研究室の紹介の時に書いてもらう。田口を中心に「NADの生合成に関する研究」を行なっている。研究材料としてはブタの肝臓や腎臓、アスパラガスなどを用い、中間体の同定・定量や関連酵素の諸性質の検討、さらには未知経路の解明に力を入れている。最終目的は、NADの全生合成経路およびその代謝調節機構の解明である。以上のような研究に対して、三教官全員がすでに学会から奨励賞を受賞している。

当研究室では、「よく学び、よく遊べ」をモットーに、家族的なふん囲気の中で、勉強以外でもよくがんばっている。たとえば、ソフトボール大会は年に数回、ボーリング大会などを時々、その他コンパは年に数回あり、最近では泊り込みでもやっている。

以上が生物化学研究室の概略の御紹介ですが、大学の近くへお越しの節は、お気軽にお立寄り下さい。

昭和五三年三月二八日

（田口　記）

「社会人一年生」

浜地文子（大26）

私の場合、社会人としての第一歩は、他の人が持つような未知の職場に対する精神的な心構えとか、緊張感とかいったものは全くといっていいほどなかったのです。というのも就職先へは十月頃から週に一度顔を出していましたので、そこにみえる人達の顔も名前もほとんど知っていて、こういう点で安心感の方が強く、新しい職場へ行くのだというさっそうとした感情も少なかった訳です。しかし、それでも勤めはじめて約一ヶ月になる今、やはりある漠然とした実感が、自分はもう社会人なんだという意識が出てきたように思うのです。

早寝早起きという言葉とは、およそ縁遠かった学生時代、気の向くままに起き、この場合は授業があろうがなかろうが一向気にせず学校につくのが十時すぎという遅刻の常習犯で、講義はほぼほどに、クラブにばかり熱中し、夕方から目が冴えはじめ、深夜まで夜ふかしをするという、いわば、だらしのない生活を毎日過ごしていた私が、初出勤の日の朝目覚し時計も、階下のけたたましい呼び声もなく目が覚め、それからの一日は、ウロウロと長く感じられましたが、なにしろ充実した一日となったのでした。

就職してからのこのような変化は、外に現われたほんの一部にすぎないのですが、いろいろな変化の底には、なにかしら、自分自身の生活管理ということに責任をもって来たことは確かなことです。職場の中での私は、まだまだ学生気分が抜け切れず、人との対応のし方にしても学生の頃とは違う難しさを感じ悩んだりもしていますし、仕事についても、責任を持つというような意識にまでは、まだまだですが、自分の生活や行動に責任を持つという態度を身につけつつある社会人一年生なのです。

支部だより

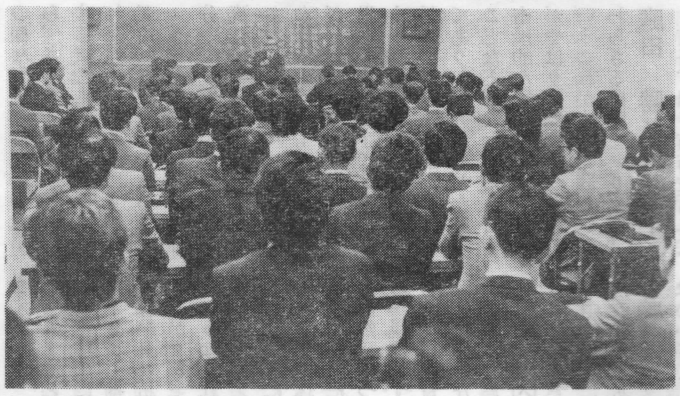
東海支部の設立

三翠化学会の目的の一つとして会員相互の親睦向上があげられていますが、この目的に向って一歩でも前進させることは、とりもなおさず本会の発展につながることであります。この方法の一つとして支部設立とその充実にあることは会報第七号の「会長あいさつ」にも記述されていることであります。

この線に沿って今回三翠化学会の第四番目の支部として東海支部が誕生しましたので報告致します。東海三県に住所または勤務地をもつ会員は総会員数の約五割を占めるため最大の支部と言えます。

四月二日（日）午後一時より青少年会館（名古屋、東別院）にて支部設立総会を開きました。会員約百三十名が参加し、まず議長に毛利広昭氏（大2）を選んだのち、渋谷明氏（大4）より支部設立の経過が説明され、つゞいて会則が討論、承認された。次に役員の選出に移り、まず支部会長に別府宏氏（専1）を選び、つゞいて会長が下記のごとくその他の役員を指名した。また同時に幹事を選出した。次に当農芸化学科の生みの親とも言われる故稲川次郎先生のご冥福を祈ったのち、三翠化学会長（代理嶋林幸英氏）および奈良省三教授のご祝辞があり、総会を閉会した。

つゞいて同所にて懇親会にうつった。まず別府宏会長の挨拶があり、高橋孝雄氏（大6）の乾盃で会がはじまった。たちまち会場にあふれんばかりの会員が互に先輩後輩の区別なく楽しく語りあいをはじめた。我々は同輩とは会う機会もしばしばあり、今彼はどうしていると言う消息は耳にも入って来るものであるが、一年でも違うともはや同窓生と言えども没交渉である場合が多いが、このような機会があると十年、二十年隔たった者が名刺を交換すれば、もはや十年来の知人の如く話がはずむのである。例えば青木みかさん（大1）と浜地文子さん（大26・新卒）とで話がはずむとか、14回生と24回生が別室でビールをはさんで歓談していると言う風景はそこここに見られた。皆さん時間のたつのも忘れ楽しいひとときを過されたと思いますが、この会で特にタテすなわち上下のつながりがとれたことは明らかで有意義であったと思います。



最後に新卒者の紹介をし、赤木先生による万歳三唱、杉本仁彦氏（大6）の閉会の辞により解散した。まったくつかの間の二時間であった。

おわりに東海支部会々則と役員、幹事を記すことゝする。転勤および住所変更により当地区に来られました方はこれらの方々にご連絡下さいますようお願い致します。

三翠化学会東海支部会則

本会は、三翠化学会会則第一六条に基き、設置するものである。

第一条　（名称）本会は三翠化学会の東海支部と称する。

第二条　（目的）会員相互の親睦と連携を深めあわせて三翠化学会の発展に寄与することを目的とする。

第三条　（組織）三翠化学会会員のうち、主として東海地区に住所又は勤務地を持ち、本会の趣旨に賛同する者をもって組織する。

第四条　（事業）第二条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

1、会員相互の親睦向上に寄与する会合及び事業。

2、その他必要な事業。

第五条　（会議）本会に次の会議をおく

1、総会

2、役員会

3、幹事会

第六条　（役員）本会に次の役員をおく

1、会長一名

2、副会長二名

3、理事若干名

4、監事二名

第七条　（役員選出）会長は総会で選出し、副会長・理事及び監事は会長が指名する。

第八条　（任期）役員の任期は二年とし、再任は妨げない。

第九条　（幹事）幹事は卒業年次ごとに一名をおきその選出は役員会が行なう

第一〇条　（総会）総会は会則の改廃・会務の報告・会長の改選その他必要の事項を協議する。

第一一条　（会議の招集）総会・役員会及び幹事会は必要の都度、会長が招集する。

第一二条　（経費）本会の経費は会費等をあて、会費は必要の都度徴収する。

（以上）

三翠化学会東海支部会役員及び幹事（敬称略）

［会長］別府宏（専1）、［副会長］毛利広昭（大2）伊佐浄（大3）［理事］渋谷明（大4）、杉本仁彦（大6）、長谷川正一（大8）鋤柄修（大12）、酒井敏秀（大16）、水本章（大18）［監事］刀根淳祐（大5）、上田雅光（大20）［幹事］別府宏（専1）、前田巌（専2）、神田芳文（専3）、青木みか（大1）、毛利広昭（大2）、伊佐浄（大3）渋谷明（大4）、刀根淳祐（大5）、杉本仁彦（大6）、畑下宏（大7）、長谷川正一（大8）、平田忠史（大9）、小出章夫（大10）、山田鐘美（大11）、鋤柄修（大12）、倉橋庄二（大13）、市原茂幸（大14）松永国義（大15）、酒井敏秀（大16）、平田秀彦（大17）、水本章（大18）、高村育男（大19）、上田雅光（大20）、山内雄治（大21）、松永幹生（大22）、谷田孝雄（大23）、西尾守男（大24）、大塩俊二（大25）森本治（大26）以上。

大学生活を終えて

菅原博（大26）

四月一日から四日まで、愛知学院大学日進校舎において、日本農芸化学会が行なわれた。わが三重大からも多数の先生方、院生が参加していたので、今後の実験の進め方、新しい視野を広げる意味で参考になると思い出席しようと思った。

それに先立ち、二日に三翠化学会中部支部設立総会が、東別院青少年会館で行なわれたので、学会に行く前にそれに顔を出した。

農芸化学出身のOBが数多く参加され、農専卒業生から、われわれ26期卒業生に至るまで、会場は満員になった。26期卒業のわれわれは三名（女性一名を含む）だけであった。この日の自分は、短かめのズボンともらい物のブレザー（黒）、ジャスコで買った二枚で一、八〇〇円のカッターを着ていた。ネクタイはしていなかった。前日、風呂にはいっていなかったので、やや頭がかゆく、外見はあまりよろしいとはいえなかった。しかしながら自分よりもひどい格好の人が一名ないしは二名いたので、救われた。

ともあれ、なんとか平穏（ちっともおもしろくない）に総会が終わり、パーティーに移った。そこで、われわれ26期卒業の三名は、自己紹介しなければいけないといわれ、前の方に立たされて、周りを気にしながら、おどおどと、ごちそうをパクついた。なにしろ周りはわれわれより年上ばかりなので、へたなことは言えないし、中には、不愛想な人もいて、隅で小さくなっているよりしかたがなかった。話すといっても、おじさんやおばさんたちに向かって何を言ったらいいのか困った。結局、顔では作り笑いを浮かべながら、人の話を聞いているふりをして心の中で、早く終わらないかなと思いながら、間をもたせ、かつ食うべきものは、しっかりいただいてなんとか終わりにこぎつけた。終わり間際でわれわれの紹介を高橋先生が行なってくれた。しゃべることは全部高橋先生が行ないわれわれは何も言わず、ただ頭を下げさえすればよかった。

ここで痛感したのは、農芸化学にいかに美人が少ないかということである。また美人と呼ばれるレベルがいかに低いかということである。なんといいましょうか、女性が少ないということは、男性の視野をいかに狭くしているかが、この農芸化学で、明らかになっているのです。

一番最後にバンザイ三唱でしめくくる予定であったが、ここで予期もしないことが起こった。音頭をとる人に、わが赤木先生が指名された。そこで先生は「……と……の発展のために乾杯！」と言ってしまったので一同大爆笑。さすがの赤木先生も顔を赤くして一瞬たじろいだが、そこは天下の大学教授、すぐにとり直し、バンザイ三唱を行なった。それから、われわれは、一つ上の先輩も交えて、総勢六名で、自分のボトルがキープしてある名駅前のパブに直行した。キョウビは、学生さんの方がいい暮らしをしているものとみえて、社会人は過酷な現状に耐え、大学生は、温室の中にいるということが、この総勢六名の中でもはっきりとしていた。

そこのパブは、バニーガールが接待してくれるのであるが、去年の九月に、たまたま、友だちと行ったところ、バニーに背中などを撫でられて、すっかりだまされ、そこの会員になってしまったのである。これは両親に内緒である。単純というか、アホというか、以来名古屋に行くたびごとにそこに寄り、しっかり鼻の下を長くして、目尻を下げるしまつである。

ともあれ、そこでキープしてあるアーリータイムズを出してもらい、デザートを頼んだ。そして、バカ話をしながら、横目で通りすぎるバニーをながめ、あのバニーは、スタイルはいいけど、顔がもう一つとか、腰のくびれがいいとか、なんとか、討論していた。

しかしまあ、社会人も学生も考えることはあまり変わらないようで、さらに大学の先生方も、その辺の考えは、われわれと同等か、われわれも負けそうだということは、後日さらにいっそう明らかになった。

ここで、そのバニーのようすについて、読者の興味を満たすように説明する。上から説明するか、下からするか、意見の分かれるところだが、自分の好みから、端っこから説明する。頭には例のバニーといわれる由縁である、うさぎのお耳ちゃん。くつは当然ハイヒール（色は記憶にない）。そして、いきなり、バニースーツとでも呼んだ方がよくわかる、胸から足のつけ根までのボディスーツ、色は人によって違うが、かなり刺激的である。彼女たちは、トイレに行ったらどうするのだろうといつも思う。

これだけで読者の興味が満たされたとは、とうてい思われないが、なにしろつけているものは、その三点だけであるから、他に書きようがない、あしからず。

さて、われわれは、そこで三時間程飲んで、勘定は先輩方が払ってくれて、結局、自分は一銭も払わずにすんだ。ラッキーとでもいうか、しかしながら、そのおかげで余分な金がふところでうずいて、はしごをしてしまうハメになった。

明日から仕事がある人は、帰ってしまったが、自分と先輩の伊藤氏は、高橋先生の行きつけの栄のスナックに向かった。そこへ行くまでには、いかがわしい場所を通っていくのであるが、キャバレーの呼び込みのおじさんたちからしつこい誘惑があったが、それを振り切り無事に目的地についた。そこで、カラオケでしっかり歌い、気がついたら、十一時をまわっており、コリャモウ帰れんと思い、ホテルの手配をしてもらい、そこで泊まることになった。

翌日、学会の会場に行き、発表はあまり聞かず、展示会ばかり見ていた。でも少しは参考になった。結局、なにしに行ったのかわからないが、金だけはしっかり飛んでいった。

『今、わたくしは…』

深谷　廣成（大6回）

札幌に来て六年半になるが、住む程に北海道の良さが分って来た。第一印象は、〝広い〟ことである。広大な原野が未だ残っているし、市内でも人間は少ない。次に自然が美しいことである。札幌から四十KM以内に、国立、国定、道立公園があり、名のない所でも景色の良い海岸、湖、山等が沢山ある。車が少ないので運転技術の未熟な小生でも気軽に行ける。そして北海道は新鮮な海産物、農産物に恵まれていて、晩酌を盛り上げてくれる。

お彼岸を過ぎると春の遅い札幌でも雪が融け始める。雪の中に、南向きの所で、黒い土が現われ、そこに〝フキノトウ〟を見つけると、自然の生命と春の息吹きを感じさせる。この頃、飲むビールは青春を呼び起し、気持を引き立たせてくれる。春夏秋冬それぞれの季節でビールは楽しいし、趣があるが春のビールが最も好きだ。こんな調子で卒業以来二十年間、ビールの泡と共に生活し、病気らしい病気もなく、全く健康である。病弱で、余り学校に行ってない小中学校の生活が嘘のようである。

四十才以上のサラリーマンに身体神経症とか自律神経失調症が多いという。マスコミを通じて政治、経済の不安が報道され、職場でも明るい話題に乏しい今日、普通の神経では参ってしまうのが当然かも知れない。体調に合せてビールを飲んでいる小生の場合、良く睡眠出来て、ストレスを持ち越すことなく、すこぶる調子が良い。この種の話は、個人差が大きく、他人に話した事はなかったが、ビール屋ではなく、医師の立場から研究し、ビールの効用を記した文献を読んで、いささか自信を持った次第である。終りに、その一節を引用する。

「一、二杯のビールの方が鎮静剤や催眠薬を飲むより遙かに身体の為に好ましい。ビールは健康を与えるが、後者は両方とも健康を破壊する」

ロスアンゼルス保健所医博　ジョージ・バリッシュ

庄山　正敏（13回）

「今私は」卒業以来十三年という年月を感慨を持って眺めています。警察の科学鑑識という、いわば異質の分野に入って十三年。職場では嫌でも中堅であり、家に帰れば一男一女の父親である事を免れず、女房の顔は明らかに中年のものでありながら、さりとて自分はまだ青年の顔をし、青年の精神構造を持っていると信じている事の現実を認識すると、自分は多分このまゝ近々停年退職を迎え、子供がはなれると老人と呼ばれる様になって、にもかゝわらずまったく精神構造の変化を伴わずにあいも変らず魚釣の話をしているうちに祖先からのお招きにあずかるのではないか、という事が水晶玉で見通す様に見えてくるのです。一体私はこの十三年間で何をしたのか、又一体これから先どれだけの事をして終るのか……。学生時代を想い起せば十年も先輩といえばまるきり怪物であり、職場のあらゆる事に精通し、人生の機微を知り、文字通り社会の中道をばく進しているものと思っていたのが、さて自分に照し合せてみるとそれがいかに誤っていたのか思い知らされるのであります。私は今けっして厭世感に浸っている訳でもなければ、自己嫌悪に陥っている訳でもありません。まるで逆で、毎日が充実していると思い、愉快な事が続くと思い、酒でものめば地球は自分の為にまわっているとさえ思っているのです。結局、小人というものはこの様な気分に時々浸りながら、さりとて別に一発奮起する訳でもなく、糸をはなれた凧のごとく風にまかせて流れてゆくものなのでしょう。その様な人間が大部分いて、その中に一握りの流れに竿さす人間がいて、これからも歴史は行え定めぬ旅を続けるものでしょうが、出来ればその道程の一里塚を自分の手で築きたい……等という事は考えても信せずに、まあ酒でものんでありし日大釣りした鮎のことなど想いながらうごく市民的な安眠の床につくのがやはり私には似つかわしい…これが十三年間のいつわらざる感慨であります。

庭田　勝弘（15回卒）

前略、四日市市役所に入り早くも十年がすぎ学生時代がなつかしく感じる昨今です。さて、四日市市役所の三翠化学会の紹介をしましょう。（大学一回）水谷和一、公害対策課長をはじめとして小沢端夫（院四八年卒）と私が公害対策課におり、糀谷次雄（一八回）が清掃工場、田中忠（四八年卒）が水道局にいます。これら化学職の職場とは良く交流があり、糀谷や田中とも過去に同一職場に私といたことがあります。現在、田中のみが独身であり、ウォンティドというところです。今後、四日市市役所に御来庁のおりは、一度公害分析室へもお寄りください。

〇五九三―五一・一一五五、内線―四四五

馬場　直道（大15）

前略、日本農芸化学会、薬学会、化学会が共催していま酵素類似機能をもつ有機化学反応の研究会も今年で六回目を迎えようとしております。でも現在のところ、生体モデル反応は実際の酵素反応からまだまだはるか遠方にあるという感からのがれられません。当研究室でもささやかながらNADHについてやっています関係上、いろいろと調べてみますと、いくつかの脱水素酵素については、酵素―基質―補酵素複合体のX線結晶解析からその活性中心がまるで目に見えるかのようなきれいな図になって報告され、その反応が手にとるようにわかるにもかかわらず一体、何が水素を移す原動力になっているのか依然謎につつまれているのが現状です。事実、酵素なしでは、基質とNADHの反応はいかなる化学的条件でもってしても現在のところ成功していません。この会報を読んでおられる方々の中でもしこの辺にふれられる機会がありましたら、一度、アタックされてみてはいかがでしょうか。

（早々）

服部　守（大15）

昭和四十二年に卒業して大企業と呼ばれるところへあこがれて入社しました。東京二年、大阪五年の生活を経て昭和四十九年三十才になりました時、自分一生の生き方について家族も含めて真剣に考え直してみました。

そして、意を決して老母一人の待つ郷里の田舎に戻り、家内は教職に復職し、小生は家から車で十五分位のところにある従業員百三十名余りの典型的な中小企業に勤務しています。微生物酵素の専門メーカーですので毎日、主としてカビを相手に楽しい生活をしております。製品の過半が輸出ですので、昨年来の天井知らずの円高が大変厳しくハネ返って来ますが、幸にも少数精鋭主義で皆がんばっておりますので、この不況時ではありますが、こゝ数年大巾な設備投資をしながら高成長を続けています。

研究部開発課という要所に席を置いていますが、内容はひところはやりの〝何でもやる課〟みたいなものです。製品の性質上、従業員の⅓以上が研究部という頭デッカチの会社ですが、皆仕事の虫ばかりですので就業時間の内外を問わず活気にあふれています。労働組合が残業の規制だとか、休日出勤の規制だとか、手とり足とり保護してくれた大企業時代のよさとは全く異質の充実したものを味わっています。古いと言われるかも知れませんが、両方を経験した者の実感です。

会社での昼休みはもっぱらテニスです。今年は市内の団体戦で念願のB級優勝を果たし、今後はA級入りができそうです。軟式テニスの世界チャンピオン稲垣選手の出身地ですのでテニスはとても盛んなところです。休日ともなりますと、テニスはしたいし、地域の活動や家事（日曜百姓）にも追われて多忙を極めています。

目下、小生が家に帰って熱中しているのは我家の設計です。来年三月の着工を目標に毎日図面をかき直しては素人建築士は悦に入っています。

鈴木真由美（大21回）

25年半過ごした三重県を離れ、静岡県人となって一年が過ぎました。ようやくあたりの地名にも少し慣れ、県西部地方であれば大体の位置関係を頭に浮かべることができるようになりましたが、静岡県全像にはまだまだ及びません。

ここ静岡の土地は気候温暖で、海あり、山あり、農水産物にも恵まれ、又古くから交通の要所として栄え、住むにはすこぶる快適な所です。特産品も多く、全国一位の物だけでもメロン（全国シェア五五・九％、茶葉（四八・六％）うなぎ（四二・二％）あじ塩干（五六・五％）ほかにかつお、しらす干、ばらと枚挙にいとまがありません。工業品も衆知のピアノ、楽器類はほとんどすべてが静岡県、特に西部地方で生産されるほか、今流行の別珍、コール天、ボール紙、変わったところで、プラスチックモデルキットなどが全国の半分以上生産されています。

こんなに豊かな土地柄でありながら、静岡県人はいたって質素で、近頃の省資源の風潮のせいでもありましょうが、使えるものは徹底して使いきる、そして外見よりも中味の良い物を捜して歩く、合理的精神の持主が多いようです。建物も県庁こそはりっぱですが、古い物が多く、仕事の関係で先日もある市役所を訪れたところ、高校の老朽校舎をそのまま利用しており、びっくりいたしました。かなりなレストランで食事をしても、縁の欠けたコーヒー茶碗にお目にかかり、「こんなところでまあ。」とこれ又びっくりという有様です。一方では、おおらかで楽天的で、あまり先のことは考えないのんびりした気風があり、（その点私の夫は典型的静岡県人？）これは豊かな土地に恵まれた特権といえるようで、悪く言えば場当たり主義、先の見通しをたてるのは苦手のようです。とはいっても、この頃の地震騒ぎでそうのんびりと構えていられなくもなりましたが…。

と、こんなふうにいっぱしの静岡県人評をしている私も、今、側で眠っている三ヶ月の子を眺めながら、「まあ、いいや、地理のことはこの子が学校で勉強してきたことを教えてもらおう。」なあんて考えているのですから、そう大きなことも言えません。

仕事は現在静岡県西部消費生活センター勤務。技師扱いですが、全くのデスクワークで、学生時代の憲法講義しか知らない私が、やれ民法だの、食品衛生法だのと、法律書片手におそろしい仕事をしております。やっぱり試験管が恋しいけれど、家族の全面的バックアップを受けながら、乳児を抱えて仕事を続けることができる身をつくづくありがたいと思っている毎日です。下手な文章ですが、近況報告のつもりで書いてみました。お役に立てば幸いです。

〒四三三
浜松市志都呂町一五三八
3月30日

加藤伊陽子（大24）

農芸化学は出たけれど

私は二年前に卒業し、二年近く林学園女子短大で岩本先生、前田先生、高橋先生にご厄介になり、この春より三重大の医学部に勤めさせていただいています。この二年間学校・先生・学生それに自分を、学生時代とは違った立場で見つめ、(1)大学の先生も人の子だなあと安心したり失望したり(2)学生とはぜいたくな身分だなあと羨んだりしています。そして(3)一体私は大学で何をして来たのか、と深く反省しています。以下(3)について詳しく述べます。

大学の四年間、私は本当に勉強をしませんでした。なんとなく学校へ行き、単位を取り卒業しました。常に受け身で逃げ腰で目的も方向もなく漠然とした期待や意志はかなうはずもありませんでした。社会に於ける大学の位置とか学生の立場がわかり始めた今、後悔の気持ちでいっぱいです。

とりわけ、農芸化学を卒業した女性として仕事の上で自信と責任を持ってやれることが何もないことを痛く感じます。知識も技術もこれという武器がなく、社会に対して無力です。それは前に述べた学生時代の怠慢に原因していることは言うまでもありませんが、それに加えて農芸化学という分野の持つ性格もひとつの要因ではないかと思います。学問の性格上実学的な部分と理論的な部分があり、その内容も無機イオンから植物・動物、遺伝子からレトルト食品まで、言わば雑学という感じです。そして例えば教育学部ならば卒業後は教師に、医学部ならば医者に、と言った学生の将来への確実な方向づけが農学部にはありません。これらのことは当然農芸化学の良さ、面白さでありますが、よほどしっかりしていないと私のように宙ぶらりんで使い道のない駄目な人間が出来上がる訳です。

しかし、「まあ大学の四年間などに大した意義を持たせる必要もない。肝心なのはそれから自分なりにどう進むかだ。」という考え方もあるようで、この際それを慰めとして頑張ってみましょう。さらに、「学業がどうの、仕事がどうのともがかずに、おとなしく結婚して家庭に入ればよい。」という大いなる慰めもあるようです。しかしそれも私には前途多難でありましょう。

林　伸樹（大1）

畑違いの行政管理庁という役所に入って満二十五年。最初の十二年間は金沢―東京―前橋―東京―札幌とめまぐるしく転勤しましたが、その後の十二年間はずっと在京、そして昨年四月から広島（中国管区行政監察局）に来ています。

先日、急用で上京したところ本庁の玄関が異様な雰囲気で、きけば水俣病関係者の環境庁に対する坐り込みとのこと（行管、環境は同一ビル入居）。私が本庁の庁舎管理責任者をしていた頃陳情団の環境庁長官室占拠事件があり、一緒に事後処理をした際の環境庁のT課長の苦渋に満ちた顔が忘れられないので、今も同一ポストのTさんのことを心配しながら広島に帰った直後「環境庁が警察を導入し坐り込み排除」のTVニュースが流れました。水俣病については、患者側も行政側も辛いだろうと思います。

行政管理庁でも、現在年間十五万件余の行政相談を受付、処理していますが、以前私が行政相談で手がけた事案の中にも、①「軍隊で上官に殴られて以来三十年間続いている頭痛が最近ひどくなり仕事も出来ないので、軍人恩給（傷病）を貰いたい。」との申出に、専門医が「医学的所見なく、因果関係の判断も不能」としているため給付できなかった例（この人は、そのあと診断した二人の医師に暴行したと聞かされました。）②「子供が以前予防注射をし、その翌日から高熱が出て遂に心身障害児になった。国の見舞金を貰いたい。」との申出に、専門医が「当時の病院のカルテで見ると因果関係なし。現時点で新たな診断は不能。」としているため給付できなかった例（この人は長官の自宅にも陳情されたとかで、私も資料を揃えて大臣室まで説明に行きました。）など、実に気の毒な例が数多くあります。公害関係も、因果関係の認定の難しい事案が多い分野です。

現在のように福祉制度が発達し、数知れぬ程多種多様な救済の手だてが講じられていながら、なおどの救済制度の網目からも洩れて行く不幸な人達を前にして苦悶しているのが行政の一面の実態といえましょう。

去る三月一日のスモン訴訟（民事）の金沢地裁の判決では、国にも過失責任ありとし、国家賠償を命じています。水俣病関係者は、坐り込み排除の翌日、国と県の刑事責任を追及すべく、関係省庁の歴代大臣と熊本県の歴代知事を告訴しました。では、例えば――

(1)最近次々と松くい虫防除の薬剤空中散布の生態系への影響の各県の調査結果が私の手元にも来ていますが、二年三年と続けた場合にも心配ないのか。山林所有者等の強い要望で行なっている空中散布も、将来もし蓄積公害の問題が起きたら、行政は忽ち加害者とされるのか。

(2)先日瀬戸内の島々をつなぐ架橋現場のいくつかを船とジープで視察しましたが、その中には、架橋でレーダーに偽像が出るとして船会社や船員組合が反対運動をしているものがありました。そこは、海が狭くわん曲した早瀬になっている所に本州四国間の客船がひっきりなしに通っており、両岸には山が迫っているため現在でもレーダーに頼る航行は危険だとされているのですが、架橋後は、もし衝突事故があれば国にも責任ありとされるのか。行政担当者の心配と悩みはふえるばかりです。

（中国管区行政監察局長）